

永遠の命の希望説教⑤

詩編 8編 1節～8節

【指揮者によって。ギテイトに合わせて。賛歌。ダビデの詩。】

主よ、わたしたちの主よ あなたの御名は、いかに力強く 全地に満ちていることでしょう。天に輝くあなたの威光をたたえます 幼子、乳飲み子の口によって。

あなたは刃向かう者に向かって砦を築き 報復する敵を絶ち滅ぼされます。あなたの天を、あなたの指の業を わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは 人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう あなたが顧みてくださるとは。

神に僅かに劣るものとして人を造り なお、栄光と威光を冠としていただかせ御手によって造られたものをすべて治めるように その足もとに置られました。羊も牛も、野の獣も空の鳥、海の魚、海路を渡るものも。

主よ、わたしたちの主よ あなたの御名は、いかに力強く 全地に満ちていることでしょう。

ローマの信徒への手紙 12章 1節～2節

こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしてお自分を立て直し、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。

1. 永遠の御計画の中で

「永遠の命の希望」というテーマで御言葉を聞き続けてまいりまして、今週で五回目となります。本日は、このテーマに沿いながら、人生の目的。そしてその完成という視座で御言葉を分かち合っていきたいと思います。

まず皆さんに紹介したい信仰問答の言葉があります。宗教改革者ジャン・カルヴァンの書きましたジュネーブ教会信仰問答の問一です。この第一問と答えが非常に優れており、それゆえに有名な言葉なのです。ちょっと長くなりますがお聞きください。

問一 「人生の特に目指す目的は何ですか。答 人をお造りになった神を知ることです。

問二 そのように言う理由は何ですか。答 神が私たちを創造され、この世界に置かれたのは、私たちによって御自身が崇められるためでありました。しかも、私たちの生は神御自身がその初めであられるのですから、神の栄光にこれを帰するのは当然であります。

問三 では、人間の最高の幸いは何ですか。答 それと同じであります。

極めて明快に、カルヴァンは、人生の目的を語ります。ここまで明確に人間の存在理由をはっきり伝えるものはありません。私たちは、神を知るために生まれてきた。そして私たちは神を賛美し、神を喜び、神を畏れつつ従うときにこそ、その本来の創造の目的にかなう者となるのであります。さきほど、詩編第8編を読んでいただきました。詩人はここで恐れと驚きをもってこのように語ります。「あなたの天を、あなたの指の業を わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは 人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう あなたが顧みてくださるとは。」

詩人は、ここで二つのことに驚いて賛美をささげております。まずこの大宇宙を、その天体の完成された秩序をもった動きを。その無限の空間の深淵さを。この全世界が、神の栄光、威光に包まれているということ。そのことに驚いております。そのような大いなる、神の造られた世界の中で、人間は有限であり、とても小さな存在

でしかないということ。しかしもう一つの驚きが詩人の心を占めているのです。それは、そのようにちっぽけな存在である人間のことを、この偉大なる神が、目に留めて下さり、一人一人の命をその御摂理によってお守りくださっている。そして祝福の中でその命を永らえさせてくださっているということです。

実に、私たち人間は神の創造の冠であると言われております。つまり、あらゆる被造物の頂点に位置するものとして、造られたのです。その第一の特徴。他の被造物との違いは何かというと、イマゴ・デイ。すなわち神のかたちを与えられているということです。神のかたちとは、すなわち神の似姿であります。それは、神との人格的な交わりに生きる者として創造されたということです。

もう一つは、この地を管理、支配するものとして造られたということです。この二つの特性は創世記の第1章26節に記されます。「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を作ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。』」詩人は、そのような特別な存在として造られた人間存在の深さ。自分のような小さな存在であるにもかかわらず、全能の神に生かされ、その交わりの中に生かされていることの偉大さに感嘆し、喜びつつ主を仰いでいるのです。ここに、すでに永遠の命、つまり神との人格的交わりがあります。そしてこのような詩人の驚きは、神の永遠の御計画を悟ったゆえの驚きでもあります。創世記から始まり、アブラハムを通して生まれた民族、イスラエルをこの地上において特別な民。つまり、唯一の神ヤハウェを証しする神の契約の民として立てて、彼らを通して御自身の存在を証しされていった。そしてその歴史の只中で、御自身の御子イエス・キリストを救い主としてお送りくださり、人類全体の罪からの救い。そして終末に至るまでの壮大なる神の御計画を、詩人はここで、巨大なパノラマを見るかのように垣間見ていたのではないのでしょうか。神の御国がこの地上で成し遂げられていく。その完成に向かってゆくその御国の民の一人として、この私も主の御業の一部として、主の御栄光をあらわす器として大切にされているのだ、ということに気付かされた喜びでもあると思うのです。聖書が語ります、神による人類救済の物語。創世記からヨハネ黙示録までの世界とは、永遠の命の回復のための物語であると言えると思います。

2. 永遠の命—二つの観点

そのように考えていきますと、永遠の命というものをわたしたちは二つの観点においてとらえることができるのではないかと思います。一つは、イエス・キリストへの信仰を通して。洗礼を通して与えられる今すでにこの地上で受けている永遠の命。聖霊による神様との交わりです。これは死によっても脅かされることのない神との交わりです。もうひとつは、さきほど申しましたような神の壮大な物語の流れの中で、やがて与えられる終末的な永遠の命です。使徒パウロがペトロがその手紙の中で語っております大いなる将来、いつまでも主と共にいることになる。キリストの栄光を受けて、天に蓄えられている財産を受け継ぐこと。全ての労苦が解かれて、安らぎを得る。そのような神の御国の栄光と喜びに与る時を待ち望んでいるのです。いわば、この地上において永遠の命が私たちの内に種として植えられた。その種は日々、成長して大きくなっていく。しかしそれが本当に完成するのは、この世を去って新しい世界に行く時であると言えるのではないのでしょうか。

確かに永遠の命が今、ここで与えられているということは、私たちの心の内に確かに主イエスを信じて、洗礼を受けて喜んで賛美しているという現実がここにあるからですね。聖霊による、神様との生きた交わりがここにあります。祈って、その祈りが聞かれ、願っていることがそのまま聞かれたり、あるいは違う形で聞かれたりするという経験をしております。心の内に罪を示されて悔い改めたり、心の平安が与えられたりもしております。ここに、すでに与えられている永遠の命の喜びがあります。でも、一方では、まだわたしたちはイエス様と面と向かってお会いしておりません。どんなお顔をしているかなどはわかりませんし、新しい体にはまだなっておりません。まだこの地上において、罪ある肉の体と共に生きており、日々、体の衰えとか、自分の肉の弱さとか、人間関係のしがらみの中で一喜一憂している毎日であります。でも洗礼を受けて私たちの全存在。心も体も、魂

も主にささげて生きているという、この一点においてはもう、将来、神の御国において永遠にささげていく礼拝を、この地上において始めているのです。私たちはすでに人間の創造の目的にかなう生き方をしています。すでにわたしたちは地上において神様に栄光を帰しているのです。そこにおいては、地上も天上も同じなのです。先ほどローマの信徒への手紙の第 12 章 1 節から 2 節までを読んでもいただきました。

「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしておいて自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。」この御言葉に、永遠の命を与えられたわたしたちの生き方が完全に示されており、この日曜日に集う礼拝の時だけではなく、主の命を与えられたわたしたちの全生涯が全て、神への礼拝となる。心が新たにされて、その生活は一新されていく。キリストによって日々新たにされていく。つまり、主の御心に従う者として生きる。そのような者とされているのであります。

3, 人生の完成に向かって

ところで、先ほどからわたしたちの人生の目的とは何かということをお伝えしてまいりましたが、その目的。神に栄光をあらわす、ということ、ともするとこのように考えてしまうのではないのでしょうか。与えられた賜物を用いて、良い働きをするということ。プロテスタント教会の信仰における、召命という考え方であり、一人一人が主の御業のためにこの地上で働く。それぞれの賜物。タラントを用いて。マタイによる福音書第 25 章の主イエスのあのタラントの譬えなどをイメージしていただけたらと思います。それぞれに神が与えてくださった賜物を用いて働く。そして主人であるキリストがわたしたち一人一人のお褒めの言葉をくださる。よくやった良き僕よ、と。そのようなありがたい言葉を頂戴することを待ち望みつつこの地上を生きるのです。またコリントの信徒への手紙一第 3 章にありますようにわたしたちの地上での働きがいつか、それが本物であったかどうか神の精錬の火によって明らかにされる。御心に適わない歩みは燃え尽きるが、御心に適う歩みは金、銀、宝石となって残る。もしそこに草や藁などを積み上げていたなら、そんなものは神の火によって燃え尽きてしまう。そういう、私たちの地上の働きが明らかになる日が来ると語られております。そういうことも確かにあるのですから、神様の御心に従って生きよう、時間を無駄にしないように大切に歩もうという意志がわたしたちの内に働くと思うのですが、あまりにそういうことにこだわってしまうと、そこを中心に考えてしまうと、どこか功績主義の考え方に陥ってしまうのではないだろうかと思われ、わたしは思うのです。つまりわたしはこれだけ素晴らしいことを神様の御前に成し遂げた。だから私は素晴らしい、などと考える。自画自賛してしまう。ここまで頑張ったのだから私は人一倍神様に喜ばれるだろうなどと考える。

しかし、わたしたちは自分の功績によっては決して救われぬ。ただ神の恩寵によって救われる。これがプロテスタント信仰の基礎であります。カルヴァンはこう言っております。わたしたちの最上の良き業でさえも、神の御前には汚れている。どや顔で、神様、わたしはこんなにできましたよ、など誰も言えないのです。しかしそれでもただ主イエスとその不完全な働きをそれでも喜んで受け入れてくださるから感謝なのです。

また、このような功績主義の信仰が自画自賛の間違いに陥るのではなく、反対に、自分は神様の御前に良いものを差し出せない、務めを全うできなかった、不完全であった、穴だらけ、失敗だらけであることを自覚し、ため息をつかざるを得ない、ということもあるのではないのでしょうか。たとえば、年をとってから信仰を与えられた人などは、なぜ神様はもっと若いうちに信仰を与えてくださらなかったのだろうか、不満を感じるようになるかもしれません。あるいは信仰生活に空白期間のある人。何かの理由で教会生活から離れていたような人は、自己嫌悪や後悔などからいつまでも解放されないかもしれません。このように、功績にばかり目を向けると本当に大切なことを見失ってしまうと思うのです。

しかし、主なる神様に与えられた人生を、本当に完成してくださるのは、主なる神御自身であり、主の大いなる永遠の御計画においては私たちの歩みは間違いがないのです。私たち個人の生活を見るならば、確かに日々、

罪を犯しておりますが、そのような罪と悔い改めの連続も含めて、主の御心の中に、永遠の御計画の中にあり、そこから決してはみ出てはいないのであります。だから、失敗も弱さも、過ぎ去った過去も含めて、主に全てお委ねして良いのです。主が初めから、私たちの人生の土台なのですから。私たちの人生に責任をもってくださっているのですから。では、そこでなお私たちの人生が、罪や、失敗や、弱さや、病気や、老いや死を越えて完成していくというならば、それはいったいどのような完成なのでしょう。

4. 内なる人の完成

そこで最後に、コリントの信徒への手紙二の第4章の16節から18節の御言葉に注目したいと思います。

「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの、「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」ここでパウロが語る落胆とは、主に伝道の働きにおける一喜一憂などです。しかしパウロのような伝道者でなくとも、信仰生活を営むわたしたちは神様に従うということにおいてこれまで考えてきたような意味で落胆することがあると思うのです。この地上においての歩みはどこまでいっても、未完成なのです。あるいは不完全なままなのです。私たちがこれまでできていたことができなくなってしまう。体の衰えだけでなく、精神の衰えもあります。外なる人とは、神の似姿であることを忘れた、自然なままの人のことです。いわば、人間の能力だけで見た人間存在を評価するなら、若い日は活気にあふれて何でもできたとしても、年を取るにつれて弱くなっていき、老いと死に向かう、下り坂としての命でありましょう。しかし決してそうではないのです。私たちの内なる人。それは聖霊によって新しくされた、神との関係にある靈魂。新たに神との交わりに回復された人間性であります。それはたとえ体や心が衰えてもなお成長していく。そして、むしろ自然な人の衰えが、新しい人を成長させていくというのです。私たちの霊は天に向かって登って行く。信仰においては、常に上り坂の歩みなのです。そのような信仰の歩みにおいては、老いや病気だけでなく、苦しみや悲しみ。失敗や罪とその悔い改めの連続でさえも、内なる人の成長につながるものであります。その意味においては、私たちに對する神の御計画には失敗はないのであります。私たちの人生における完成。それはどれだけのことを成し遂げたか、ということや、タラントを増やしたということではなく、私たち自身がよりいっそう、神を讃え、神を喜ぶ者とされていくことそのものなのであります。そこに神は、良い実りができたと喜んでくださるのであります。コリントの信徒への手紙二の第3章18節にこのようにあります。「わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造り変えられていきます。これは主の霊の働きによることです。」栄光から栄光へと、復活の主と同じ姿に変えられていく。そして最後に、わたしたちはこの世界を去る日が来ます。神がこの地上での歩みを終わらせてくださり、神こそが私たちの人生を死をもって完成させてくださる。だからわたしたちは死が、神の御許に召されることであり、わたしたちが実った果実として神様に喜ばれながら収穫としてもぎ取られ、主の食卓に並べられる。わたしたちは永遠に主にその実りを味わっていただく。そこでわたしたちも主の栄光を喜び味わうのであります。ですから、わたしたちは、過去を振り返って、失われた時を悲しむことも、神を仰ぎ見るものとしてふさわしくありませんし、老いや病気によってできていたことができなくなっていくことを悲しみすぎることも、信仰者としてふさわしくありません。自分に残された時間が少ないから、心血を注いだ仕事も、これまでの歩みも、自分の思いからすればまだまだ未完成で、納得できない、不本意なものであったとしても、それもまた主が良しと言ってくださると信じて委ねていきたいのです。なぜなら神こそがわたしたちの人生の主人であり、神こそがわたしたちの人生を完成してくださる方であるからです。わたしたちの内にある、神を讃える思い。神を慕う心がますます大きなものとされていきますように。神に喜ばれ、神を喜ぶ者として、今週も新しい心で歩むことができますように。お祈りをいたします。

教会の頭であられる主イエス・キリストの父なる御神様。わたしたちもいにしへの詩人と共にあなたの御業と、人間に与えられた素晴らしい地位を驚き、喜びつつあなたを賛美いたします。わたしたちの罪と失敗だらけの人生を、洗い清めて下さり、私たちを日々洗練してくださり、御国にふさわしい者としてくださいますことを感謝いたします。あなたの御前には、わたしたちは成長し、良き実りとされていると信頼します。日々、あなたを喜ぶものとされているからです。あなたがわたしたちの魂の実りを喜んでくださっているからです。わたしたちの内にあります永遠の命が、神の国の到来と共に本当に目に見える確かなかたちで新しくなることを信じ、希望をもって、前を向いて歩いていく信仰を深めてくださいますように。とくに高齢のために、病気と闘っておられる方々。外なる人の衰えを悲しんでいる方々の上に、主よ、あなたが深い慰めと力をもって伴ってくださいますように。毎週の礼拝の中で、主の御心を知らされ、そこに生き続け、私たちの人生の最期に至るまで、あなたの栄光を仰ぎ、感謝する者とならせてください。全ての悩みや憂いを、あなたに委ねていく信仰をお与えください。

この諏訪教会のこれからの歩みを祝福の内に導いてください。人間の力によってではなく、あなたの主権のもとに伝道の業が為されていくということを、わたしたちに示してください。これからも、全ての必要をお与えくださいますように。言い尽くしません感謝と願いを主イエス・キリストの御名によって祈り願います。アーメン